

Title	行動修正実習の変遷に辿る山本先生の功績と、30余年の協働・交流
Sub Title	
Author	大森, 貴秀(Ōmori, Takahide) 近藤, 鮎子(Kondō, Ayuko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.93 (2022.) ,p.[88]- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本淳一先生退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000093-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

行動修正実習の変遷に辿る山本先生の功績と、30余年の協働・交流

大森貴秀¹・近藤鮎子²

¹ 慶應義塾大学文学部 ² 株式会社エルチェ

長い交流の歴史を伺いながら、当時から今の学生指導に通じる一貫した山本先生の臨床スタンスを幾重にも感じるインタビューとなりました。常に側で学生を支え、見守ってくださっていた大森先生から山本ゼミのこれまでの印象や今後の展望についてお聞きでき、とても楽しい時間でした。山本先生との交流は今も常に続いているし、あまり「思い出」という感じではないなあとおっしゃる姿が印象的でした。(近藤鮎子)

大森貴秀先生（以下、大森）に近藤鮎子（以下、近藤）がインタビューを実施しました。

近藤：はじめに、大森先生の専門分野と研究内容について教えてください。

大森：一番大きなのは発達心理学で、最初の頃の研究は障害児、障害者の社会適応、社会参加について色々と、調査とかそういったことでデータを取るような形のものが多かったです。いくつか乳児の研究もしながら、発達の研究もしました。今はどちらかというと一般のお子さんの育児支援の、様々な介入の効果についての検証とかそういったものについて、看護の先生方と一緒にやっている (Komoto, et al., 2015; Nagayoshi et al., 2016) ところがひとつ。それから、ゲームの心理学 (大森・原田・坂上, 2017) についての研究を坂上貴之先生 (慶應義塾大学文学部・名誉教授) と研究をしている部分もあります。発達心理学と、看護、そのあたりをバラバラに“色々”やってる、という感じですかね。

近藤：山本先生との出会いについて、当時の印象なども踏まえつつお聞かせください。

大森：確実に覚えているのは、大学院のM1、修士1年生のときですね。山本先生が心理学実験の担当をされて、私がインストラクターの立場で授業に参加していて、そのときの関わりが最初かなと思います。心理の先生方で比較的体格がいい方がおられなかったところで、すごくがっしりした先生がいらっしゃったので、豪快な先生がいらっしゃるな、と思ったのが最初の印象だと思います。今もそういう印象はあるんですけども、繊細な部分もあることがその後わかってきた感じですよ (笑)。実験が終わった後に、学生に説明をするインストラクションを私が担当していて、何かのきっかけで私がrateとratioの違いは何なのかという話を始めたんです。始めたときは、山本先生も「お、いいこと言い始めたな！」という感じで、私もやる気になって話を始めたんですけども、まだまだ知識が足りなくて、途中で空中分解するようなことになってしまい、最後しどろもどろになったら、山本先生が「しょうがないなー」というような感じの顔をされた、というのを覚えています。その時のエピソードをすごく強烈に覚えていますね。

近藤：共同研究といいますか、一緒に働くようになったのはいつ頃でしょうか。

大森：行動修正実習の授業はその頃からあって、最初私は大学院生として参加していて、たぶん博士課程の頃に佐藤方哉先生と山本先生と一緒に担当され始めました。その頃から教わり始めて、流れて、私もずっと実習に関わっているうちにいつの間にか担当者の1人に加えられて、行動修正実習の共同

担当者として、授業を持ち始めたのがきっかけです。最初は実習の担当は佐藤方哉先生と、私の師匠である富安芳和先生だったと思います。理論的なところをお子さんに適用するという形の実習として始まったので、最初はとっても実験的だったような気がするんですよ。行動修正の実習を入れるという考え方自体が、慶應の心理では比較的新しい挑戦だったので、たぶん先生方もどう指導するかがあまり固まっていない状態で、そのうち山本先生が非常勤として参加され、指導を受けるようになって、そこから応用行動分析学についていろんなことを私も学ばせていただいたのかな、と思います。最初は山本先生も大学院生を指導する形でお子さんに関わるモデルを見せてくださって、本当にいろんな実践の場面でどう行動分析学を使うのかを教えてくださいましたので、そこから少しずつ私も応用行動分析学ってこういうことなんだろうな、というのが何となくわかってきたんですね。実験だったら上手いかわからなくてもデータを取り続ければ意味のあることができるんだけど、実践の場面でそういうことをやっちゃだめなわけですよ。成果をきちんと出す、効果をきちんと示し続ける必要があるんで、その辺のスタンスを山本先生が入ってらっしゃって、とても理解できるようになって、実践の場面ではこういう使い方をするんだなというのを本当に実感したというのがありますね。社会学研究科で予算がついて実習室を作った当時は一軒家だったんです。中に3部屋か4部屋ぐらいあって、面接室、プレイルーム、訓練室、観察室があって、外に砂場もあったんですね。最初看板が実習室ではなく「臨床心理学相談室」だったかな。そのころ人間科学専攻に臨床心理学を担当される先生がいらっしゃって、臨床心理の相談を受けていたのでそういう看板を出していたんですね。その先生が退かれた後、実習室として本来の機能にしよう、という、ことで「社会学研究科実習室」という名前前で前面に押し出して、実習の科目を作りましょうということで行動修正実習ができたんだと思います。その後、一般のビルのフロアだった西別館に移ったころには、山本先生が中心的な役割を果たしておられたと思います。専任として入ってこられて、すぐに発達心理学のゼミを持たれて、学部教育もされるようになった形です。実習室も山本先生が活用されて、設備等整えられたのだと思います。この辺りは山本先生に聞いたほうがいいかな。おそらく当時とても苦労されていたので。やっぱり、社会学研究科で実習室を1個持つ形で非常に独立した施設なので、維持をするためには、いろんな部署に対して説得がいるわけですね。そこで山本先生は様々な貢献をされていたと思います。山本先生がいらっしゃらなかったら、社研実習室は途中で消えていたんじゃないかな。山本先生あつての社研実習室、というのが私の勝手なイメージですね。

近藤：行動修正実習の変化について、何かお感じになったことはありますか？

大森：実習は実習、実験は実験。あくまで実習というのは教育なんだ、学生が実習に出ることでスキルをきちんと身につけることが必要なんだ、というその辺の目標をはっきりさせられたと思いますね。逆に言うと失敗できる、失敗してもそこからスキルを学べばいいよ、というスタンスで山本先生も色々指導されているなと思います。当然、実践の場面で失敗するとえらいことになってしまうと思いますが、実習の場面では山本先生なり私もお手伝いするなりでスーパーバイズをしていますから、取り返しのつかない失敗というのはない状態で、学生さんは色々なことに挑戦できるんじゃないかと思っています。山本先生がメインでしっかりやられるようになってから、親御さんに対して何を示せるのが非常に重要なポイントになっていて、親御さんにもきちんと満足していただけるような関わり方を大事にされてきたんじゃないかと思っています。最近のご家族を含めて、どういう支援ができるか、お母さんのスキルアップを含めて色々されています。今の実習を受けている学生さんは、多少なりともお

母さんと面談をするというのをやらされていると思います。山本先生がお母さんのリクエストや質問に対して受け答えをされているのを見て、私も勉強させていただいているところはあります。

近藤：大森先生は教員としても、実習に参加する学生のことをよくご覧になっていたと思うのですが、学生の変化で何か感じられることはありますか。

大森：山本先生が大学院生についてはガッツリ指導されるので、お子さんと関わりながら、お子さんの役に立ちながらちゃんとしたデータをどうやってとるのか、研究的な目的と実践的な目的のバランスのとり方。あるときはお母さんに成果を見せることを中心にして、あるときはデータをしっかりと取り取るということを両立させて、きちんとお子さんとの間でやりとりをする中からデータが取れて、それが目に見える形のデータとして分析できるようなものにしていくという、その辺のスタンスは、山本先生のところを出られた大学院生の人たちはしっかりしているなと思います（例えば、Matsuda, Omori, McCleery, Yamamoto, 2015）。これは多分、他の臨床心理系の大学院では学べないことだと思います。山本先生ほどアカデミックにデータを取ることに神経を使っている先生は少ないんじゃないかと思います。行動分析的に実証できるようなデータをどうやって出すのかを最初から考えながらお子さんと関わって行くんだよ、というところ。やるからにはデータを取ってそれを成果として発表できることは前提だ、という形での実践を考えていらっしゃる。そこがしっかりと教育されているのが今の山本ゼミの卒業生の皆さんじゃないかなと思います。山本先生がアメリカに留学されるときに、誰かが「山本先生がアメリカに行って帰ってきたら、アメリカ人っぽく髭をはやして帰ってくるんじゃないですか」と言ったことがありました。それに対する先生の返しが「それは絶対にない」と仰って。何でかというとう髭をはやすとお子さんが怖がる。お子さんが親しみを持てなくなる可能性が高いので「そういう可能性やリスクがあることは絶対にやりません」と断言されていた。人まるまる全体が刺激なので、お子さんにとって自分がどんな刺激になっているのか、ということを常に考えていらっしゃるな、と思います。実習のミーティングをしていますが、どんなことがお子さんにとって刺激になっているのかという感覚がすごく鋭くて、学生さんを指導するときにも、お子さんにとってどんな“刺激提示マシン”になっているのかを常に意識するように求めていらっしゃいますよね。最終的には自動化して「意識しなくても効果的な刺激提示ができるマシンになりなさい」と常に仰っています。山本ゼミの卒業生というのは、皆さんがそういう風になって出ていくんだと思いますが

近藤：山本先生との研究的な繋がりについてもお聞かせいただけますか？

大森：そうですね、山本先生は基本的に応用行動分析学なので、単一事例でのデータの結果をまとめることをやっていらっしゃるって、ただ、山本先生自身はそれをやりながらもちゃんとグループデータの比較、つまり統計的な分析の重要性をとってもよくわかっていらっしゃる先生なので、それをどういう風に単一事例の自分たちの研究データに持ち込むかということを常に考えておられる。なので、そのときにどういう風なアプローチがあるのかというときに私に声をかけていただいて、例えば学生さんの博士論文を出すときにどういう分析方法があるだろう、といったことをよく一緒にディスカッションさせていただいていますね。最近、熊仁美先生（NPO 法人 ADDS 共同代表、社会学研究科非常勤講師）のプロジェクト^{注1}と一緒に講師として出て、山本先生が単一事例での介入の仕方について応用行動分析の話をして、私がそういうときにどうすれば介入効果を説得力を持って示せるの

かということ、実践畑にも、学問的な分野でも主張できるのかということをお話させていただきました。そこで単一事例で効果量 (effect size) はどういう意味を持つんだろうなという話をしました。色々と普通の群比較と違う部分もあるし効果量の扱い自体が定まっていない部分がある中で単一事例の場合に効果量の指標をどうやって持ち込めるのかということ、最近熊先生とか石塚祐香先生 (筑波大学、社会学研究科非常勤講師) も考えていらっしゃるって山本先生にもいろいろアドバイスを頂いて、私自身がいろいろ勉強させていただいた感じですね。やっぱり応用行動分析学の単一事例研究の一番の鍵というか重要な部分は、グラフにあると思うんですね。だからグラフを見て熟達した応用行動分析家だったら、どのくらい効果があるのか、どのくらい甘い部分があるのか見て取れると思います。それをどういう風に数値でまとめ上げられるのかということ、いろんな研究者の人が考えていると思います (藤巻・山田, 2021)。なかなかこの指標はこのタイプの効果は示せる、このタイプだと上手く反映できません、と言った形で一長一短あるというのが今の単一事例研究での効果量の状態かな、という気がするんで、それを更にもう一回まとめ上げて、どういうタイプでもある程度は反映できるような効果量が作れるのか、その可能性を探ってみる必要があるんだろうなと思っています。行動分析学会だったらグラフを見せればいわけですよ。それでみんな理解してくれますから。それを実際に蓄積して行って、こういう支援だとこういう効果がありますよ、ということを外に示すときに、示し方の一つのオプションとしてそういう効果量のような数値指標が出せないか、ということは考えておられると思います。その辺は、今山本先生のお弟子さんたちも考えておられることなんじゃないかなと思いますし、山本先生もお弟子さんたちにぜひやってもらいたいと思っていますね

近藤：検査の実施方法について、山本先生と議論されることもあったそうですが？

大森：障害を持っているお子さんや、特徴を持っているお子さんに対する検査のやり方についてはよく、毎回発達検査の話が出るたびに議論をしています。山本先生が一番考えていらっしゃるの、障害を持っているお子さんに対してどこまでやり方についての柔軟性をもたせられるのか、というところだと思うんですね。追加の手がかりを与えるのではなく、例えば提示を出すときに25cm前の真ん中に出しましょうとか、多少近くても、ずれていても、普通のお子さんなら全然影響がないようなことも色々決められているけれど、それが変わるだけでできるんだ、というケースが色々あると思うんです。別に普通のお子さんにとっては難しさが変わることはないんだから、変えてもよさそうなものだけれども、実施の手引きに書いてあるから守らなきゃいけないということはいっぱいあるので。逆にいうと本当は決めてほしくないんですね。「注意を向けられる場所に出せばいいですよ」という書き方をしてくれればいいけれど「25cm前に出してください」と書かれると、それ以外できなくなっちゃう。決めたほうが楽になるのは確かなんです、それが成績に大きくかかわっているようなお子さんもいることも考えて手引きを作ってくれればな、と思います。そこまで考えるのは難しいんだろうなとは思いますが。検査の場合は基本的に全く同じやり方でやれば、同じ条件であることは間違いないので安心なんです。バリエーションをつけてもいいというためには、バリエーションをつけても結果が変わらないことを証明してからじゃないとできないので、そういう意味では「念のため決めておきましょう」というスタンスになるのはしょうがないような気がします。山本先生は当然、お子さんと関わる時にお子さんの注意がどうなって、何に対して注意が向いていないかということ、はすぐわかって、ちょっとこうすればできるだろうと予測がつくので、その辺は余計に



図 1. インタビュー画面のスクリーンショット (左:大森 右:近藤)

まどろっこしいんだと思います

近藤：山本先生との協働・交流は、大森先生ご自身にどのような影響を与えましたか？

大森：私は学部で応用行動分析学を学ばなかったので、行動分析学と言ったら佐藤先生がやられていたような、動物の行動実験に基づいた徹底的行動主義だったんですね。山本先生がやられているのを見ていて、行動分析学を応用するということを実感させていただきました。雑に言ってしまうと、ひとつには恥ずかしさを捨てなきゃいけない、ということがわかりました。私がお子さんに検査をする際には、お子さんにとって一番効率の良い刺激の出し方は何なのかなというのを考えて、少し大げさというか、すごいにこやかに、いつもの自分の行動パターンとはちがうな、という感じでやるわけです。それが単なる演技ではなくて、一番効果のある関わり方はなんなのかを考えて、私も訓練室に入るときは人格を変えるんだ、というぐらいの気持ちでやらなきゃと思えるようになったのは、山本先生の姿を見ていたからだと思います。お子さんとの接し方の基本的な部分は、山本先生を見て学んだと思いますね

近藤：山本先生との一番の思い出はなんですか？

大森：山本先生と合宿や学会に行ったことがほぼないんです。山本先生と私とお子さんで電車ごっこをしてプレイルームの中を走り回っているという映像を VHS のビデオを何年前に見つけ出して、こういう時代もあったな、と思い出しました。本当に楽しかったかどうかわかりませんが、みんな本当に楽しそうに 3 人で走り回っている様子を見たりして。もちろん研究室の運営に関して色々一緒にお仕事はさせていただきましたけど、それはもう本当に順調に、特に波風も立たず、山本先生の人望に従ってやったというだけなので。佐藤先生みたいな山本先生の師匠筋に当たるところの世代の話と一緒にできるのは、山本先生にとっては私ぐらいまでなんですよね。そういう意味では、一緒に思い出話ができる間柄ではあると思います。

近藤：最後に、山本淳一先生へのメッセージをお聞かせください。

大森：多くは実習を通じて、研究室でのやりとりを通じてお付き合いをさせていただいて、付き合い自体は 30 年以上になります。特に実習に関してなど、私なんか素人に毛が生えたような人間でしかないのに、意見を聞いてくださったり、議論してくださったり、分不相応に尊重してくださっているな

と思うので、感謝しかありません。3月で退職とのことですがけれども、これからも是非とも是非とも、色々なお力をお借りできればなお思います。特に実習室。先生が長年に渡り力を尽くされて今の状態まで繋げてくださっている施設なので、これが今後先細りにならないように、是非ともお力をお貸しいただければなお思います。これからもよろしく願います。

引用文献

- 藤巻峻・山田剛史 (2021) Rではじめるシングルケースデザイン. ratik
- Komoto, K., Hirose, T., Omori, T., Takeo, N., Okamitsu, M., Okubo, N., & Okawa, H. (2015) Effect of early intervention to promote mother-infant interaction and maternal sensitivity in Japan: A parenting support program based on infant mental health. *Journal of Medical and Dental Sciences*, 62, 77-89.
- Matsuda, S., Omori, T., McCleery, J. P., & Yamamoto, J. (2019) Comparing reinforcement values of facial expressions: An eye-tracking study *The Psychological Record*, 69, 393-400.
- 大森貴秀・原田隆史・坂上貴之 (2017) ゲームの面白さとは何だろうか. 慶應義塾大学出版会.
- Nagayoshi, M., Hirose, T., Toju, K., Suzuki, S., Okamitsu, M., Omori, T., Kawamura, A., & Takeo, N. (2016) Parenting stress related to raising infants receiving treatment for retinoblastoma. *Psycho-Oncology*, 25, 1507-1511.
- 注1 国立研究開発法人・科学技術振興機構の社会技術研究開発センター RISTEX「オープンサイエンスに基づく発達障害支援の臨床の知の体系化を通じた科学技術イノベーション政策のための提言」(研究代表者:熊仁美、2019年から2023年)において、事例研究によるデータを集積・解析するシステムづくりを進めている。

著者紹介

- 大森貴秀 (おおもりたかひで) 慶應義塾大学文学部 助教
 大森貴秀 (2012) 日本の乳幼児母子相互作用の特徴乳幼児医学・心理学研究, 21, 107-115.
 大森貴秀 (2013) ネット対応テレビ, ゲーム機が家族の居間利用に及ぼす効果哲学 (三田哲学会編), 130, 149-164.
- 近藤鮎子 (こんどうあゆこ) 株式会社エルチェ 発達療育レンテ市川
 近藤鮎子・山本淳一 (2011) 発達早期支援における短期集中スタッフ訓練の効果慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要:人間と社会の探求, 71, 49-64.
 近藤鮎子・山本淳一 (2013) 自閉症児の交互交代遊びを支援する:支援方略の予備的検討 哲学, 130, 185-204.